

学位論文題名

東アジア仏教における救済思想

－感応思想を中心に－

学位論文内容の要旨

本論文は、東アジア仏教、特に中国・日本仏教において見られる「感応」の思想について、その中国における起源と発達、日本仏教への移入、日本におけるさらなる発展と変遷とについて克明に辿って検討を加え、これを東アジア仏教における救済思想と位置づけて、大きな思想の流れとして把握して思想史として編むことを試みたものである。そのために論文を中国と日本の二部構成とし、中国における感応思想の検討のために中国仏教者の著作、僧伝や感通録、応驗記などの資料を検討しているが、まだ国訳されていない文献資料に訳注を加え、これらを重要な資料として用いている。日本仏教については平安時代の験記物の検討から始め、日本天台の最澄以降、道元や親鸞、日蓮など、叡山で学修した鎌倉仏教の祖師たちに及び、最後に現代仏教に至る。このように感応思想を基軸にして中国・日本の仏教を通貫している。

本論文は第1部が5章、第二部が4章より成る。第1部「中国における感応思想」第1章では、「感応」の語は『易』に由来し、思想としては中国在来の天人合一や天人相関の思想にその淵源があることを紹介し、それが仏教に採り入れられたことで、仏・菩薩と衆生との間の相関関係として捉えられ、衆生に対する仏・菩薩の救済の働きかけの原理、あるいは機序として働くようになったと論じている。

第2章では、中国仏教における諸宗派の感応論として南朝梁代の成実論師の説を紹介し、その説を批判する三論宗の慧均の感応論について詳述する。すなわち成実論師は、「感応」の「感」を機根の「機」として捉え、その「機」について、善と悪という倫理的価値基準から、および過・現・未の時間的枠組において種種に解釈し、いかなる場合の「機」に仏の「応」があるのかということ論じている。しかし、このような「感応」の解釈は、仏と衆生とを二者相対として捉えるものであり、有所得見に墮した戯論であると、三論宗の慧均（六一七世紀）は痛烈に批判する。彼と同学の三論宗の大成者吉蔵も、固定的立場に偏らない無所得正観の立場から「感応」を捉えているが、「感応」の解釈では両者異なっているとして吉蔵の解釈も検討している。

第3章では天台を取り上げ、智顛と六祖湛然の感応論について論じる。これは感応論において智顛の「感応道交」の句が日本天台や鎌倉新仏教の諸師達に広く受容されていることから知られるように、智顛の考えが後世に与えた影響が大きいからである。本論文によれば、智顛の感応論は空観を基盤としながら、その解釈に四悉檀を用いている点で、極め

て実践的な解釈を示し、これが智顓の特徴であるとする。

第4章では、道宣においては「感通」が感応と重なる点を論じている。道宣の『続高僧伝』中の「感通篇」、『集神州三宝感通録』、『律相感通伝』などの検討を通じて、道宣は「感通」と感応を同義で用いており、彼においては感応は「応現」とか「神通」の意義が強められていると論じる。この用法は日本の『日本霊異記』にも見られるという。

第5章では、『華嚴経』『法華経』などの応驗記を検討対象として、その中から「感通」「感応」の二語がどのような意義を担っているかを検討している。この章では自らが国訳した『大方広仏華嚴経感応伝』も検討資料の一つに加えている。検討の結果、これらの応驗記には感応の本来の意義が希薄化され、単に奇瑞、靈驗を表す語として用いられていることを指摘している。

以上が第1部中国篇であるが、続く第2部「日本における感応思想」第1章では、まず奈良・平安時代の感応思想を『日本霊異記』、『法華験記』の二書を検討することによって明らかにしようとする。前者では感応の語義として、道宣と同じく奇瑞、不思議な出来事、といったような意味になっているが、後者では本来の救済の意味で用いられていると指摘している。そして次に日本天台の最澄、円珍を検討し、中国天台の智顓、湛然の感応思想が日本天台にも受け継がれていることを論じている。

第2章では、鎌倉時代の感応思想として、親鸞と道元との感応についての受容と理解を検討している。親鸞の場合では浄土往生思想と他力、廻向の問題と感応の思想をどのように扱うかが論じられ、道元の場合には彼が天台の感応思想を承けていることを明らかにしている。

第3章では、「特に日蓮の感応思想について」として、日蓮の感応思想が別出されて取り上げられている。日蓮の感応思想は他とは異なる特徴があり、「応」の主体が仏・菩薩ではなく、法華経という経巻とされていると指摘する。それは現在が仏無き末法の世であるという日蓮の時代意識の現れであるとするが、さらに、奇瑞のあるなしが仏法の邪正を決めるのではないという日蓮の言葉の検討から、感応の語が含意する奇瑞、不思議な出来事ということには日蓮は重きを置いていないと指摘する。

第4章では、現代仏教に見える感応思想を検討している。ここでは日蓮宗と浄土真宗のそれぞれの祈祷・祈願における感応思想が取り上げられている。そして日蓮宗においては本来の、仏・菩薩と衆生との不二一体であるという第一義的意味合いが薄れ、現世利益の意味合いが強くなっていると指摘している。一方、浄土真宗では現世利益を目的とする祈り、祈祷は本来厳しく排除されるべきものであるが、一部分では肯定されているという現実があることも指摘している。

以上の検討の結果、結論において、中国における感応の起源より、中国仏教で論議され、発達した感応思想が日本に移入され、時代を経て今日に至っていることが論じられており、感応思想を基軸にした東アジア仏教の一思想史が提示されている。

以上の本論のほか、**「資料篇」**として慧均『大乘四論玄義』**「感応義」**および幽貞編『大方広仏華嚴経感応伝』の国訳及び訳注を付す。

本論文の分量は、本文が400字詰め原稿用紙換算で約700枚、訳注資料篇が同じく約400枚、計約1100枚である。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 藤 井 教 公  
副 査 教 授 細 田 典 明  
副 査 教 授 佐 藤 鍊 太 郎

学 位 論 文 題 名

## 東アジア仏教における救済思想

－ 感 応 思 想 を 中 心 に －

本論文を審査した結果、本論文の当該領域における研究成果は以下の3点に要約された。

1) 感應思想についての従来の研究は中国仏教に偏っており、日本仏教における研究はこれまでほとんどなされていない。その中国の場合でも、天台智顛などについては比較的取り上げられてきたが、他の仏教者については資料上の制約もあって、ほとんど先行研究がない。本論文は中国と日本の仏教の双方にまたがって幅広く検討を加え、この感應思想が救済の思想として東アジア仏教全体を通貫する大きな流れであることを論証し、これを思想史として編むことを試みた。この試みはこれまでなされたことのない新しいものである。本論文が叙述した感應思想の流れは幾分ラフではあるが、スケールの大きい成果が達成されている。

2) 中国における感應思想の検討で、これまで国訳されていない資料『大乘四論玄義』『感応義』と『大方広仏華嚴経感応伝』とを国訳し、訳注を付したことは、この分野における今後の研究に大きく貢献したといえる。前者の文献は南朝梁代の成実論師たちの感応論がまとめて紹介されている貴重な資料であるが、難解のためかこれまで国訳されていなかった。また後者のものは説話集研究にとっても重要な資料であるが、これも国訳がなかったものである。本論文ではこれらの資料が利用され、これまでほとんど明かでなかった成実論師の感応論とそれに対する慧均の説が明らかにされたのも大きな意義がある。

3) 日本における検討において、最澄を初めとして、道元、親鸞、日蓮などの鎌倉仏教の祖師らの感応論が検討され、また現代仏教にも及び、それぞれの意義ある結果が得られている。この検討はこれまでほとんどなされておらず、本論文の得た結果の意義は大きい。

以上の研究成果が本論文には認められるが、また次のような欠点も認められる。それは、

1) 東アジア仏教と銘打ちながら韓半島の仏教が扱われていない。この点は著者の今後の喫緊の課題である。

2) 検討の対象が幅広いためか、叙述内容にややラフさが感じられる。今後の課題として、きめ細かな検討が望まれる。

以上のとおり欠点も見られるが、ほとんど未開拓のテーマを大きなスケールで描ききつ

た功績は大きく、欠点もその価値を減ずるものではない。よって、本審査委員会は全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものであると判定した。